

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
3月号

毎月23日発行
通巻379号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
★年間購読料 3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



ねこやなぎ 奈良市 和田 保さん撮影

大倭神宮社務所竣工報告祭 および 申孝祭法話より

大倭神宮について (その二)

昭和51年2月23日

法主 矢追 日聖

矢追家の一大事の因縁

大倭神宮は私達の先祖さんが神まつりをしていたところですが、現在の神域の形というものはごく小さいです。けれどもその中に、古代から現在まで、細い一本のヤマトの源流というものが流れてきているということが、私はあるがたいと思います。

大倭神宮のところは台地で、その前は登美の小川(※白砂川。ちようど3頁の「登美谷の名残」に出ている)です。その台地の呼び名は岸ノ上といいます。現在には岸ノ上という字を使っていますけれども、岸の神。今、住んでいる者達は藤の木といいますが、古い土地の台帳なんかは全部岸ノ上なのです。それは神まつりしていたから岸の神。

それで幸か不幸か知りませんが、けれども、うちの大先祖さんが現在の倭神宮の神域を屋敷にしたと思うのです。中世の時代だと思えるのですけれどもね。一番根元になつていたところは、神まつりの場ですから、杜さんとしてみんな守つてきたのです。大きな木もあつたらしい。

それが、矢追の個人の家の事情で、そこへ新宅を作らなくてはならないということになつた。それがぼちぼち神さんが源流に戻るひとつの動機ではあつたと思えます。明治四年から、そのコワイコワイという杜さんを開いて、新宅が建てられた。ということ、太古の尊厳な杜さんやうちの先祖が一応荒らしたわけなのです。そういうようなひとつの大きな罪

がありまして、それから三代か四代も経つてはいるのですけれども、やっぱり先祖の犯した罪は、子孫の者が拭かなければいけない。非常に神罰もあるし、世間並の家庭生活はできないし、それは「一大事の因縁」(ながそねの息吹)13ページ(108ページ)というあの内容を見てもらつたらよくわかると思います。

そういうようないろいろな曲折がありまして、今度は昭和十五年、皇紀二千六百年の記念の時に、大倭神宮を撤去せよという命令がまいりました。それに対して私も、これは神さんの守りをするだけではないに、いわゆる神域というものを保存しなければいけないと思ひまして、人間として尽くせることを尽くしてきました。やっぱり形の中に心があるのですから、形がなくなれば神さんに対しても冒瀆することになっていきます。うちの先祖が荒らした神域であるだけに、なんとかしてそれを守らなくていけないというのが、昭和十五年だったのです。

それからぼちぼちいろんな方法で今日まで来たのですが、今度は終戦と同時に日本が戦争に負けたお陰で、宗教法人令だとか宗教法人法だとかができて、官僚式な権威づけた神社とか仏閣というものは一応全部ご破算になりました。そして、本当の神社、本当のお寺というものは、庶民の信仰の力によって宗教的に成り立つものであつて、権力者がつくるものではないのだ、と。権力者の権威のためにお寺を建てたり、神社を創つたりというのはいつさいご破算になったのです。官幣大社であろうと、どんな社格の公認神社であろうと、全部取り消して宗教法人ということに一律に変わってしまった。大倭神宮の場合、その点ではもっとも恩恵に浴しています。それで今度は宗教法人として大倭神宮は法的に保護される形になりました。

た。現在、形こそ小さいですけども、宗教法人ですから、全国の神社仏閣と法的には同じ資格なのです。

まあ私も矢追の家の者として神宮の神域とのつながりがありますので、生きている間は何とかしてお守りしなければいけない。現在、私達がお守りして伝えておりますが、神さんというのは、これは何万年昔からの神さんでございます、大倭神宮がその神さんに対する祭りの庭、祭庭(齋庭・白庭・さにわ)でございます。

太古の祭りの庭

大倭の場合、御本尊というのは、古代からのうちの神さんのおつしやられたように磐座です。神社の木造建築ができる以前の形をとれといわれたから、そうしているのです。神社に建物ができるのは仏教の影響によります。仏教が仏像をまつり、堂を建てる。それを日本人達が真似てから、日本の神社というものは木造建築が始まりました。

それ以前の日本では、天地自然の農耕の神様をお祭りする神聖な場所、いわゆる齋庭というものだったのです。その御神体はここにあるように磐座、石の座において神様をそでお祈りする、というのが古い形です。大倭神宮でも過去に推古天皇の頃から、神社の形の木造建築があつたこともありますが、古代の我々の先祖達がお祭りしていた当時の形、磐座を現在も伝えております。この間も平安神宮の御本殿焼けて御霊は無事だったとか新聞に書いてありましたが、大倭神宮だけはどれだけでも燃えても御神体は焼けることもないし、持ち出す必要もない(笑)。これもありがたいと思ひます。

大倭神宮はそういうようなお宮さんでございます、これからも皆さん信仰していただくと共に、

特に神意、神様の心というものは、皆が幸せになつていくということですからね、皆仲良くして幸せにいくよう、お互いが拝み合う精神によつて一体となる。皆さんひとりひとりが、私も含めて、自分に対してそういうような気持ちを持つた人間になるよう努めていくのが、宗教の世界だと思ひます。

建物は人間が利用するもの

お陰さんで出来ました社務所は、これは神さんやなしに、人間を対象とした建物なのです。雨が降れば中に入らなければいけないし、集まつているんな話し合いしてもよろしいし、踊りの会あつても、お茶の会をやつてもいいと、神さんと共に遊ぶ、神さんと共に楽しむという、人間を相手としての社務所なのです。そういうような意味で建てておりますので、建物そのものは神さんと関係ありません。お互いにタバコの不始末すれば、平安神宮も同じで焼けます。これは、神さんとは無関係なのです。

今日、皆さんの陰の力、表の力とか、また、技術者のいろんなご苦労を重ねて、またお金もかかりましたけれども、みんな寄つてたかつてひとつの社務所というものが出来上がったのです。

これは十年ほど前から私の気持ちの中にありました。私の父や母が生きている時に出来たらなあという気持ちはありましたが、これも天の定めで、昭和三十八年に私の父親が神宮のところの住まいで亡くなつていて、それから、ちょうど十年経つて昭和四十八年に母親が亡くなつていて、今年の二月十七日が母親の満三回忌になるのですが、その点は自分の両親に対してすまないなあと思ひます。

けれども、建物そのものは残るのだし、宗教法

人の建物でございますし、皆さんが利用してもらう為に建てているのですから、今日はその意味でありがたかつたなと思っています。いつ出来上がらないといけないというような定めもなかったのですけれども、自然の流れに添ってきましてところが、だいたいこの二月二十三日であれば竣工する見込みが立つというようなことで、今日午前中にお祝いをさせて頂きました。

昨日は一日清めの雨もございました。今日は朝からいいお天気で、今もパラパラとしておりますが、鎮めの雨、喜びの雨だと思えます。

長年、大倭神宮は日本の歴史の裏にあつたのですけれども、これから、だんだん表の方に出て行く時期ではないかと思えます。

建物が建つたから嬉しいというのではないのですけれども、やはり人間が寄り集まることには建物が必要なのです。これから、皆さんのそうしたお徳というものも、大倭に集まる人達が受けてもらつたら結構だと、そういうような意味で私も非常に喜ばしく感じます。後も建物のことでそれから管理もしないといけないだろうし、また、掃除もしなければいけないし、とにかく私の生きていく間はお守りさしてもいいです。けれども、私もまたいつあの世に行くかも知れません。大倭にはお陰さんでたくさんの人々がこうして居てくれますので、まあなんとかが形だけは持ちこたえ、あるいは守ってくれるだろうと思っています。いつ自分が目をつむつても大丈夫だという喜びは持っているのです。

それから、この神様は派手な事は好きではありません。昔からでございますが、案内状も出さないで、皆さん耳で聞いた方だけが集まりだと思っています。

宗教法人というのは、公衆の皆の幸せの為、公

共の用に供する為に出来ています。社務所の建物も宗教法人の建物、土地でございますので、皆さん方も心の修養の場として、おおいに利用してもらつたら結構だと思えます。本日は皆さんもお忙しいのに、ご参拝下さいまして、ありがとうございます。

(大倭神宮でのお話と旧拝殿でのお話を、一つにまとめています。

この後にもお話がが続いているのですが、その部分については、昭和51年3月号『おおやまと』第112号で「自他の幸せを祈る」という題名で掲載されています。 (編集部)

登美谷の名残

第6回

「そまぎだに 楠木谷」

矢追 隆 義

楠木谷という地名は、近鉄学園前駅西方約一

五〇メートル位の線路傍にある小集落の地名で中町藤の木に属している。古代この地方は大木が茂り、そまぎ 柚師等が神社、仏閣等の用材として伐採に従事した場所である。谷間から流れ出る楠川(地元の人は白砂川と言う。今は富雄南中学校の西側を流れている小川)を利用して、材木を鳥見川(富雄川)へと流し、こし 木嶋で集積し、更に大和川へと運んだ。

楠川は、今でこそ小川であるが、その昔は大

矢追日聖師の著書

「ことむけやはす」

- 第1巻 『やわらぎの黙示』 平成3年12月23日・野草社刊
- 第2巻 『ながそねの息吹』 平成8年8月28日・野草社刊

・お申し込みは：郵便振替でどうぞ
 座番号 01050-6-67002
 座名 大倭出版局

・連絡先：TEL0742-44-0015
 FAX0742-45-1092
 E-mail ajisaimura@ohyamato.jp

・料 金：

	冊数	本代(税込み)	送料
	1	3,150円	380円
	2	6,300円	450円

大倭出版局

木を流すだけの水量があつたと考えられる。その片鱗として、近時、大和団地KKがこの川の一番を宅地造成をするまでは、楠木谷近くの楠川近辺は湿地帯で泥田が多、百姓達はこの場所を「ふけ」と呼んでいた。

又、楠木谷南方の山を、みやま 宮山と呼び楠川大明神の祠が在ったとの事で、祭神はおおやま 大山昨神、九頭神で、水神として祭られていたらしい。今でもこの宮山を中心として北側を宮の後、南側を宮の前という地名で残っている。

明治初年この祠が何の理由か解らないが、あだんじや 葛上神社(中町の氏神)へ合祀されたと言えられている。葛上神社の祭神は「健康須佐男命」と「大山昨神」である。

参考までに、この宮山は霊験あらたかので、俗人の持主が続かず、造成時には大倭教法主、矢追日聖氏がお祭りし、管理されていた。

寸 莎

第50回

故 我原 芳子さん



我原芳子さん帰幽される

今回の寸莎では先月亡くなられた我原芳子さんを偲んで書いてほしいと言われました。霊界での名前は慧華余社古比女命ですが、私は「よっちゃん」と呼ばせてもらいます。

よっちゃんは、去る二月十八日に六十歳の若さで、しかも結婚四十周年の記念日に帰幽。

昭和十六年十月七日和歌山県有田郡金屋町に生まれる。幼少の頃に両親を亡くし、昭和二十九年（中学一年）に、先に大倭へきていた長兄反保隆臣を頼って大倭へ入門した。

中学卒業と同時に次兄を頼って大阪に出て、次兄の働く食堂で働き、そこで調理師として働いていた同い年の利尚さんと出会った。十八歳の時首腸になり入院、入院費等一切の面倒を利尚さんの世話になった。二

年足らずの交際で昭和三十六年に二十歳で結婚。新所帯は大黒町で構えた。数年後に長女が誕生。

大倭へ帰ることになったのは、昭和四十一年三月で、その頃大倭安宿苑初代苑長今井富藏さんの弟三二郎さんが須加宮寮で調理の仕事に携わっておられたが、病気で亡くなり、調理してくれる人を探していると、苑長たつての願いで利尚さんに「是非きてくれないか」と、声が掛かる。そして利尚さんは須加宮寮で調理師として、よっちゃんは寮母として勤める。その頃の寮母は二十四時間勤務状態の中、住苑者から大変好かれたお母さんの存在だった。

「親」として慕っていた法主様やかあさんからも厚い信頼を得、そして誰にでも優しく好感のもてる理想的な人だったと思います。

その後は男の子ばかり四人の子どもが大倭で生まれ、四男一女に恵ま

れたが、三男を二歳半の可愛い盛りの不慮の事故で亡くされています。昭和六十三年に大倭安宿苑の寮母を辞めるまでの二十二年間、懸命に働き、子どもを育てあげた肝っ玉母さん。

その後は、かねてからの願望だった飲食店、衣料販売等を手掛けていたが、平成八年頃より身体の不調を訴え入退院の繰り返しになっていました。子ども四人それぞれに家庭を持たせ、孫九人にも恵まれ、やつと落ち着いてきた矢先のことでした。

子は宝なり

母の入院で、子ども達が一致団結したのは言うまでもなく、従兄弟ながら、見直してしまいました。

長女、美佐和は二日に空けず病院を訪ね、看護に明け暮れた日を送ってくれたし、旦那さんの南孝明さんは大変気持ちの大きい、理解ある人で陰ながらみんなのまとめ役をしてくれました。

長男、尚康は本当に長男らしく皆に気配りが出来、父親は大変心強かったことだと思えます。

次男、尚陽は母が危篤状態になった時にも、一番落ち着いて対応してくれていたので安心できました。

四男、尚敏は一番母親っ子だったみたいだが、やはり男としてしっか

りした態度に感心しました。この度の我原家の悲しみは、これからの大きな期待への始まり。よっちゃんも喜んでいいると思います。

私の想い出

大倭育ちの私達子どもの頃には特に遊びに行けるころもなかった時期に、よく家へ遊びに行かせてもらいました。いつもやさしく、明るく、綺麗で、憧れでした。叔母なのにずっと、「よっちゃん、よっちゃん」と慕っていました。

結婚する時に「私は変わった苗字やつたから、結婚する時はありふれた苗字の人としたかったのに、また変わった苗字になってしまったわ。千久佐はありふれた苗字の人と一緒になれてよかつたなあ」と言われたことや、病院にお見舞いに行った時、「やつぱり孫は可愛いやろ」「可愛いなあ」と会話したことが今でも心に残っています。

きつと向こうの世界でも、いつも家族のこと、大倭のこと、皆のことを気にかけて見守ってくれていると思えます。

ご冥福をお祈りします。

（書き手）中村 千久佐

我原芳子の姪で反保隆臣の次女

※写真は、平成7年文化行事の時御上神社にて 故鈴月かあさんと

風ぐるま

望郷400年

波濤を越えて14代

博多にて 矢部 顕

博多に赴任して、駅頭に降り立ったとき驚いた

ことのひとつは、表示が日本語、英語、韓国語、中国語で書かれていることだった。地下鉄のドアにも次のようなシールが貼られていた。「ドアにご注意ください」「BE CAREFUL OF THE DOOR」

「문어 주의하세요」「開關門時請小心」

この街は、そして九州はアジアにむかって開かれた土地なのだ、という実感をもった。国際化時代の掛け声であらゆる都市で外国人のための標識が美しくなり、エイゴが氾濫しているが、韓国語、中国語が併記されているところはほとんどないだろう。

考えてみれば、九州はあらゆる時代に外国とむきあってきた土地だ。とりわけアジアとの門戸であったことに気づく。弥生人渡来、魏志倭人伝、遣隋使、遣唐使、白村江戦、元寇、朝鮮出兵、長崎出島、蘭学、隠れキリシタン、からゆきさん、薩英戦争……。次々と脳裏にうかぶ外国との関係の歴史。その歴史の背後にあっただろう膨大な人間のドラマ。

「1998年10月19日、韓国南原市で採火、20日韓国海洋大学の実習船ハンナラ号で釜山港から川内港（鹿児島県）にむけて出航。21日川内港を経て串木野市の浜に到着し、歓迎セレモニー。22日は串木野市から火を江口港に迎えて火の奉迎式典、その後美山へ向かい、400年祭を記念して建設された共同登り窯に点火。受け継がれた技と土と火が400年目にはじめて感動の出会い

をする」

薩摩焼400年祭のニュースに接したとき、記憶の片隅に残っていた韓国語を話す人たちの村のことを思い出した。

博多大丸で薩摩焼第14代沈壽官の作品展をみて、神業のごとき技量に驚き、白薩摩に魅了された。この作品を創りあげた人に来てみたいと思

った。薩摩焼の窯元、鹿児島県東市来町美山。美しい

大倭病院 ボランティアグループ あじさいの箱 合同作品展

平成14年2月28日～3月2日

病院の常務理事だった中村恵一さんの発案にあじさいの箱が協力して始まったという、この作品展も、今年11回目になりました。気のせいかもしれませんが、今年は一段と盛況で、病院を囲む地域の発表会のようになってきたなあと感じました。見に来られたある患者さんがアンケートに答えて「私もやってみたくらいものが、まだまだありました」と言っておられたのが印象に残りました。(春)



書
菅野台 小西伊英さん



油絵
藤ノ木台 金屋敷忠儀さん



押し絵
若草台 和田ひでさん(98歳)

山に囲まれたちいさな村の風景は他の村とは趣を異にしていた。どこことなく品格が漂っている。「村そのものが名品である」、かつてここを訪れた高名な陶芸家が言ったという。沈壽官と書かれた表札のあがっている武家門を入ると、韓国国旗がかかげられ、武家屋敷風の家に大韓民国領事館とかがれたプレートがある。民間の名誉総領事としての称号ゆえか。掃き清められた庭のむこう、緑したたるなかに工房、展示室、登り窯などが奥にひろがる。明治まではこの村では韓国語で語り、薩摩藩の公式韓国語通辞はこの村からでることになっていたそう。いまでも窯仕事にもなう技術用語は韓国語という。

串木野の浜に石碑が建つ。「遙かに風濤を越えて吾等が開祖この地上陸す」。東シナ海は小雨にけぶっていた。連行された陶工たちとその子孫は幾度となく望郷の想いでこの東シナ海を見つめたことであろう。島津義弘の軍隊に朝鮮全羅北道南原城でとらえられ、拉致され、ついにはこの薩摩に連行され帰化させられて以来400年……。その運命のなかで、土を探し、窯を築き焼き、物をつくりつづけて14代。

「明日は熊本で一番大きなお祭り、ポシタ祭りです」。こんなことを熊本で知人から聞いた。「ポシタって何語？ 日本語なら漢字でどう書くの？」私は訊ねた。

『滅ぼした』のポシタ。加藤清正が朝鮮をやつつけた(㉑)ことが祭りの名称だということをはじめて知った。

「いまだポシタはまずいんじゃない？」「正式の名はあるけど、みんな昔からそう呼んでいる」島津軍とともに加藤清正の軍勢も豊臣秀吉の朝鮮出兵に参加した。加藤軍の若武者が部下を引き連れて釜山上陸後そうそうに投降した。「この戦いには大義がない」として、敵に向かつて一矢も放つことなく降伏したのは、かねてより朝鮮の文明の高さを尊敬していたからだという。その武将の名は沙也可。沙也エ門の記録まがいとも、加藤軍にとつては恥ずべき汚名であるから偽名とも

考えられる。文にあこがれ寝返つた沙也可は武によつて朝鮮の人々につきし、戦の後もさまざまな功績で李氏朝鮮の高官となり尊敬をうけてきた。沙也可の子孫で構成される70戸ほどの友鹿洞(ウロクトン)の村、そしてその村を故郷とする人は約500戸4000人という。14代沙也可は長く教職につき、のちに慶尚北道の教育委員会に

勤務されていたとのこと。

松浦半島の先端、呼子の名護屋城。人影もまばらな夏の夕刻、つわものどもの夢のあと。巨大な城跡の天守閣跡から玄界灘を眺める。杓岐がかすみ、対馬は見えず。そのむこうには朝鮮半島があるはず。弥生人渡来からはじまって、魏志倭人伝に書かれている有史以来、いやそれ以前から、ここは朝鮮半島からの最短ルートとしてさまざまな交流のキイポイントの場所であつただろう。

秀吉はここに全国から30万の兵を集め、無謀な朝鮮侵略をくわだてた。1592年、97年、文禄・慶長の役。負け戦で98年には全面撤退したが、その蛮行、殺戮のかぎりは韓国の反日感情の底流になつているとされる。薩摩焼の沈壽官、有田焼の李參平はじめ、高取焼、伊万里焼などの始祖となる多くの陶工が拉致され連行された。そもそも九州の大名ははじめから高度な陶磁技術をもつた人を連れて帰ることの目的を隠しもつていたのでないか。

島津はのちに薩摩焼の密貿易で大儲けをし、より強大な藩となつた。このほかにたくさんの人々がさらわれ、ポルトガル商人に奴隷として売られたりして、人さらい戦争の様相が濃い。イタリヤにはコリアという姓をもつ200人ぐらいの村があるという。

博多駅で、JR九州が企画する旅行「歴史探訪シリーズ『文禄・慶長の役』4日間」のパンフレットを見つけたときは驚いた。こんなことが有り得るのか。こんなことが可能なのか。朝鮮侵略の足跡を侵略した側の日本人がぞろぞろと訪ねまわるなど、韓国人の人が好意をもつはずがないではないか。歴史学者の調査でもなく、ただの旅行

者が団体のパックで歩き回る、そんなことが許されるのか。

内容を見てさらに驚いた。博多出発ではあるが、ごていねいに最初に名護屋城と博物館に行き、また博多にもどつて、高速艇ビートル号で釜山に渡る。なんと第14代沙也可の講演までではないか。

仕事でお世話になつているJR九州の旅行社ジヨイロードの谷富夫氏に訊いてみた。よくぞ訊いてくれたという表情で「あれは私たちのチームが企画したものです。当初、誤解されるのではないかと不安もずいぶんありましたが、正しい歴史認識を知るためにと韓国側にも熱意をもつてご相談し協力を得られるまでになつたのです」「たいへんに好評で予定したよりもはるかに多く回を重ねています」。

韓国側も日本側もそのような努力をしていることがうかがわれる。

時代が大きく変わりつつあることを感じた。

「朝鮮出兵が運命、異国の地で4世紀——連行の陶工、不戦の武将。先祖が誇り——14代目が杯」こんな見出しで、お二人が鹿兒島で対面したという記事を見た。

先祖が異国の地に住みついて400年。沙也可を誇りに思うという沙也可14代目金在徳(キム・ジュドク)さんと、韓国に思いをはせる沈壽官さん。二人は「沙也可を仲立ちに、過去の不幸な歴史を見つめなおし、両国の距離をもつと縮めたい」と焼酎を酌み交わしながら語り合った。と、西日本新聞は伝えている。

(毎年のF・I・W・Cによる日韓合同ワークキャンプ、ここでも日韓交流が続けられています。編集部)

こぼれずみ
新島淳良さん逝く

——二人の帰幽——

大倭の坂道を長靴をはいた足を少し引きずりながらよく歩き廻っていた、「フクちゃん」こと福本義憲さんが、去る一月十二日に大倭病院で静かに息を引きとった。七十一歳だった。

福本さんは昭和四十年に大倭安宿苑の救護施設で生活を始めて以来、三十七年近くを大倭で過ごしたことになる。以前に足首を切断していたので歩行が困難だったが、農作業や力仕事を手伝うのが好きだった。道の途中で出会って、「どこへ行くの」と尋ねると、「先生のところ」と答えた。先生というのは青山日元さんのことで、注連(しめなわ)のワラを打ったり畑の畝作りをしたりして、不完全ながら日元さんの手助けをしていた。

彼に何かを問いかけると、大きな澄んだ瞳でこちらをじっと見詰めてから、「フフ」と低い笑い声を返すことがあって、その表情にふれると、何ともいえぬ安心感にみだされた。ただし、こちらの思い通りに福本さんを動かそうとすると、テコでも動かぬ頑固さをあらわす一面もあった。

福本さんのお通夜を須加宮寮で執り行うことになっていった日の朝、三重県の津市にある山岸会の生活実顕地に住んでいる新島淳良さんの息子さんから、「父が亡くなって今夜お通夜がある」という電話が入った。七十三歳だったとのこと。

新島さんは早稲田大学教授の地位や財産を投げ捨てて新しい社会づくりのために山岸会に飛び込んだ人で、ずっと以前に「緑のふるさと運動」ということを提唱して、法主様にも共同の呼びかけ人になって欲しいと、何度も大倭に足を運んでくれたことがあった。新島さんはいつも新しい企画を立て、周囲に積極的

大倭会第269回文化行事
—長曾根日子命シリーズ—
春爛漫の鴉(鳩)の首を訃ねる。

トミ谷の長曾根日子命の足跡を訪ねて、その土地の方のお話を聴き、野外料理を楽しむなどして春の一日を楽しむ。

- 日時：平成14年4月21日(日)
午前10時30分集合
- 場所：大倭神宮
- 交通：近鉄学園前駅南出口より奈良交通バス西千代ヶ丘行きに乗り(約10分)千代ヶ丘二丁目下車、徒歩3分
- ルート：大倭神宮→鳩の峯→西千代ヶ丘公園(大倭神宮の上の公園)その後公園で野外料理
- 注意：小雨決行(雨天の場合は食事は大倭会館に移動)
- 弁当：おむすびなどは持参のこと
- 世話人：湯浅芳郎 TEL 0742-48-3389

に呼びかけ、社会を革新していくことに熱い関心を寄せ続けるというタイプの人だった。法主様は、「ああいう賢い人もおるんじゃない」と感想をもらったこともあった。福本さんのお通夜に参列しながら、福本さんと新島さんという対照的なお二人が同じ日に帰幽したという偶然の不思議さをゆっくりとかみしめていた。

(岸田 哲)

あじさいの箱
チャリティサークル
第11回作品発表会

とき：5月10日(金)・11日(土)
10～16時(11日、～15時)
ところ：大倭会館
作品：書道・生花・押絵・編み物・紀州手鞠
(その他サークル活動状況)
歴史教室・英会話・太極拳・着付・語り教室 など
[一般参加]
写真・絵画・手芸 など
お問合せ：0742-48-3389 湯浅

第三絃演奏会

紫鳳会主催

とき：2002年4月7日(日)
ところ：大倭拜殿にて
開場：午後1時(1時30分開演)
出演：大倉佐和子・紫鳳会門人
ゲスト：檀野未佳・永廣孝山・菊重精峰
●曲目 時空(とき)を超えて
さくら・ピョンピョコリン
ことうた～わらべ唄～
Revolution 他
入場無料
心ばかりのお茶とお菓子を用意してお待ちしています。
お問合せ 06-6902-5405 大倉
0742-48-3389 湯浅

和光祭

とき：2002年3月31日(日)
10時30分～16時30分
ところ：あじさい邑
いつかどこかであったよな、なにげない色のにげないお祭りの日。踊りがあって、音楽があって、ちょっとした食べ物屋さん、茶館も出現します。春の一日、是非遊びに来て下さい。
参加費：500円
お問合せ：075-981-9500
林 修三

あじさい日誌

2月15日 大倭神宮月次祭。

2月18日 邑人の我原芳子さんが帰幽され、満開の梅の花の下、大倭会館で教長さんを祭主として19日前夜祭、20日帰幽祭が行われました。この日はまた、大倭安宿苑苑長だった故今井富蔵さんの命日です。(4頁の「寸

2月19日 F I W C 関西委員会の12人が、昨年に続き中国広東省チンエン市にあるハンセン病回復者のヤンケン村でのワークキャンプに出発しました(3月2日、全員無事に戻る)。それが、テレビ大阪の「ニュースアイ」という番組で放映されました。交流の家のホールでの話し合いの場面に、昇ちゃんも真面目な顔で映っておりました。

2月23日 午後1時から大倭神宮で申孝祭が行われ、午後2時から大本宮拝殿で月次祭が行われました。この日は平成7年の申孝祭の日の法話を聞かせてもらいました。

2月24日 大倭墓地で法主様の長女・五十嵐輪孺美さんの次男で故季彰さんの墓碑入魂式が行われました。平成2年、22歳の

■喫茶倶楽部「和み」より
お休みを水・日・祝としていましたが、2月より土・日・祝に変更しています。

若さで帰幽されています。

A B C テレビ、夕方の関口宏が司会する「ほんパラ……」という番組で『グリーン・フアーザー』(杉山満丸著・ひくまの出版)が紹介されていました。

「あつ出てるよ!」と知らせてくれたのはいずれも純とは言えぬ準読者クラスの方々。ホウッ読んでくれたのかと喜んだ編集部でした。

3月5日 和泉市の河野龍子さんが、先月号のテープ起こしお願いの呼びかけに早速電話をくれ、この日テープを取りに来て下さいました。生前の法主様にお会いしなかつたのでお声が聞きたいと思っていた、と。

続いてEメールをくれた長野県大鹿村の河本明代さんにも別のテープ起こしをお願いできて嬉しくありがたいことです。

3月6日 大倭神宮月次祭。拝殿前のオガタマノキが3つ咲いているのを、神宮へ向かう前、数人でお花見していました。林修三さんと友人の高山明美さん、千葉綾子さんが「和光祭」の下見に来邑されました。

3月10日 第400回の祝会が開かれました。初期の祝会では「くにのもと」の第三節がうたわれていたとのこと(最近は一・五節だけでした)。祝会の本義を考えると、「……進めやすめ我等が被禊……」という第三節を高唱して始めることになり

ました。岸田文子さんが初参加。大倭安宿苑では

(菅原園)

2月24日 なら一〇〇年会館での「春咲きコンサート」に10名の住苑者が出演し、レンタルで世界の民族衣装を用意してファッションショーを演出。朝日新聞奈良版のコンサートの記事で菅原園が取り上げられました。



(須加宮寮)

2月24日 同じく「春咲きコンサート」に出演、オリジナルなすがや体操とすがや音頭を披露しました。

3月5日 住苑者、職員、介護実習生が入り混じり卓球大会が行われました。

(長曾根寮)

2月16日 家族会主催のお楽しみ会。「花の一座」を迎えて、歌に踊りに楽器演奏と賑やかな演し物に会場がわきました。

(八重垣園)

3月3日 ひなまつりで特別食やお楽しみ会。大正琴・銭太鼓・ハーモニカ・キーボードの競演がありました。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 4月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*須佐緒祭(大本宮) 4月8日(月) 午前11時より大本宮拝殿において祭典を行い、正午より各自持参の弁当などで園遊会を賑やかにを行います。

すさのお祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のものとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

*大倭会主催第四〇一回祝会 4月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*箭負祭(大倭神宮) 4月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の霊威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

*月次祭(大本宮) 4月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

趣味のように読んでいた過去の新聞、『すさのお』や『おおやまと』。まさか編集に関わる事が出来るとは! 嬉しさと同時に何十年、何百年後に読む人がおられるかと思うとちよつぱりドキドキ。法主さんが伝えたかったことが歪まずに編集できただろうか、心もとな。濁世の風吹き荒ぶ中、日本精神の源流、平和を願う気が、光となつて世の中を照らすことを願わずにはおれない。まずは自分を禊するしかないか。一步一步、心に喜びを感じながら…。(鶴)

鈴月かあさん 一年祭のご案内

日時: 平成14年4月19日(金) 午前11時より
場所 大倭大本宮拝殿

祭典のあと、大倭会館において直会があり、粗飯を用意します。

鈴月かあさんは、人が賑やかに集まるのがお好きでした。平日でお忙しいこととは思いますが、ご都合のつく限りどなた様でもご参加下さい。